

真実の作り方

正しい疑問に対する近似的な解を持つ方が、
間違っただけの問いに対する正確な解を持つよりま
しである（ジョン・テューキー）

信友 建志

鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科 健康科学専攻 社会・行動医学講座 心身歯科学分野

1 イントロダクション

「エビデンス・ベースド」という言葉も、すっかり華やかなりし昨今である。

かと思えば、一方ではまだこの語が日本に根付かないことを嘆く声もあり、他方ではその偏重を戒めて、たとえばナラティブ・ベースドを説くものもあり、状況はなにやら混沌とし始めているようでもある。

福井次矢は一九九九年の論文で、この「エビデンス・ベースド」という語と臨床疫学の関係を改めて振り返っている¹。これはカナダのマクマスター大学のDavid Sackettらが中心となり開発されたもので、90年代に入って、同大学のGordon Guyattがこれに「EBM (evidence based medicine)」という新しい名称を与えたことを契機として、一気に広く受け入れられるところとなった。「疫学」という語への抵抗感をなくしたこの命名の効果は大きかった、と福井は述べているが、たしかに疫学は明確に規定された原因物質の引き起こす、物理・化学的な因果関係のメカニズム解明という近代医学を代表するパラダイムには直接に大きく寄与するわけではない。歴史を振り返ると、近代医学の初期から、医学者たちは平均をはじめとする統計的データに冷たかった。『実験医学序説』によって近代医学における実験の必要性を確立したことで知られるクロード・ベルナルには、「ヨーロッパにおける平均尿」という気の利いた皮肉がある。ヨーロッパ大都市の大きな駅の公衆便所から採取した尿が、平均的な尿

ということになるのか、と。

むろん、それは当時の統計学の水準の問題、ないしベルナル本人の理解の問題であり、こんにちの統計学の洗練が、そのような無用な誤解を一掃した、と言うことは可能であろう。とはいえ、そのような変化はたんにある一分野の発展によってひきおこされるわけではなく、大きな地殻変動に位置づけられるものである。つまり、一分野における応用と有効性の確認というだけでなく、統計学的なりアリティが社会全体に影響を及ぼすものであったことが、さらに受容に拍車をかけたのである。そしてそのことをある程度踏まえておくことで、われわれは冒頭に掲げたような混沌を解決することはできないまでも、無用な対立関係を煽り立てることは避けることができる。

すでに福井の論考自体が、一九九九年の段階で患者やその家族の信念や価値観といった定性的枠組のなかにおいてこそ定量的なデータが意味を持つ、と結論づけているし、広井良典はそれを患者の訴えやニーズといった「現象」に対する迅速な対処としてのEBMという方向に読み直してもいる²。今風の言い方をすれば、たとえばナラティブ・ベースドとの連携、というところだろう。

しかし、その高邁な理念から十五年経った今も、状況はあまり好転しているとは思えない節もある。であるなら、むしろこの「定性」と「定量」なるものをひとつの地殻変動の上に乗せてみてはどうだろうか。つまり、それらは広井の言うように「ある目的に対する

¹ 福井次矢「医療の新しいパラダイム：Evidence-based Medicine」、西村昭男編『医療科学 原点から問い直す』（医療文化社、一九九九）所収、一九三～二二二頁。

² 広井良典「『エビデンス』とは何か—科学史から見たEBM」、『週刊医学界新聞』第二三八一号（医学書院、二〇〇〇）。

共通したメソッド」というだけでなく、ある共通の変化によって成立した二つのもの、と見なしてしまうのだ。その流れを概説することで、いささかでもこの状況を好転できないか、あるいはそこまで高望みはしないでも、さらに広めの視点を付け加えられないか、それが本稿の主旨となる。

2 統計的リアリティの基礎：実体概念から関係概念へ

さて、ベルナルの皮肉はかれ本人の資質の問題でも無ければ、「平均」なるものに対してだけではない。ヨーロッパの思想の流れから言えば、そもそも数多的なものは重視されないし、関係的なものも重視されない。統計的リアリティはこれらの大きな山を乗り越えることになるのだが、まずはその流れを続く二節で概説しよう。

私見では、統計的リアリティを支えるもののひとつに、実体概念から関係概念（カッシーラー）と呼ばれる変化がある。古来、哲学においては、焦点となっていたのはあくまで実体とその本質であった。たとえばアリストテレス的な、とされる世界観のなかでの火の位置づけを考えよう。物質はすべからく四大元素（空気、土、火、水）の混合であり、それらはまたその本質に従って場所を持つ。火は高いところに。それゆえ、モノを燃やした煙は高所へと、おのれのあるべき場所へと帰っていくのである。

しかし、科学の進展とともにそれは熱学の見地によって置き換えられ、一連の簡潔な方程式によって説明されるものとなる。これが、実体概念から関数概念への移行である。カッシーラーのまとめによるとこうなる。

「つねに感覚の材料のみから作り出されうるのである新しい〈定在〉を知覚の世界の〈背後〉に捏造するかわりに、科学は、そこにおいて諸知覚の関連や連関が完全に表現されうに違いない普遍妥当で知的な図式を描き出すことで満足するのだ。[...]それ自身の内に直接の知覚的内実をとどめることが少なれば少ないほど、それだけ忠実にその課題を満たしているのである」³。四大元素がこの〈定在〉であることは言うまでもない。そして、「諸知覚の関係や連関」を描き出す図式についてカッシーラーはたとえばロー

ター・マイヤーを援用する。物質は定数から変数の領域へと移行する、それは「原子量の値が実体的本性とそれに従属する諸性質とを規定する変数であることが証明される」に及んで可能になった移行であると。

これでは少々分かりづらいかもしれない。一例を挙げよう。たとえば天体である。人びとは空の星を観測し、円運動を行う天体があることに気付いていた。しかしそれは、遠く高く輝く天体は不死にして不朽、完全なものであり、円運動は運動のなかでもっとも完全なものである、という類比によって基礎づけられていた。これが、端的な惑星の運動方程式に置き換えられる、ということである。この場合、火星が赤いとか、水星が素早いとか、そうした「直接の知覚的内実」はいっさい触れられない。知覚される諸惑星と地球の観測者の関係が普遍的に妥当する図式によって描かれるのみである。

だが、それがすんなり受け入れられたわけではない。ここでは、運動方程式とその解を求めることは行われていても、作用因を求めることがなされていないのか！ それが十八世紀初頭に見られる典型的な批判であり、ニュートンもこの点については実に慎重であった。イアン・ハッキングは、ライブニッツが機械論的に規定されるべき作用因が排除されていることを理由にニュートンの重力論に否定的な見解を示し、ニュートン自身もまた知人に、作用因たるべき神について留保する書簡を送っている、という一コマを紹介している⁴。こんにちでも、われわれは人間どうしの付き合いともなれば、他者の理解の際にはむしろその「実体」の「本質」に頼りたいものである。たとえば中沢新一は「西洋人の科学は虹がどのようにできるかは説明しても、なぜできるのかは説明しない」というチベットの賢者の言を紹介しているが、時を遡ればそれは西洋と東洋の対立だったわけではない、西洋にも見られた対立だったのである。

ここでターニングポイントとなるのはヒュームである。一般に、ヒュームはわれわれが必然と考える因果関係は、結局のところ人間がその繰り返される経験のなかで勝手に作り上げた習慣に過ぎない、と批判していたとされる。そのことに間違いはないが、しかし同時に、それはフォーコーの言葉を借りれば「蓋然的なもの認識」⁵によって徐々に形成される記号（シー

³ エルンスト・カッシーラー『実体概念と関数概念』（山本義隆訳、みすず書房、一九七九）、一八九頁。

⁴ イアン・ハッキング『確率の出現』（広田すみれ、森元良太訳、慶應義塾大学出版会、二〇一三）、第十八章。

⁵ ミシェル・フォーコー『言葉と物』（渡辺一民、佐々木明訳、新潮社、一九七四）、八五頁。

ニュ)のネットワークを可能にするものでもあった。フーコーであれば(たとえば先の天体に見られるような)類比性、ハッキングであれば作用因、そしてわれわれの文脈で言えば実体と、取り上げる対象はやや異なるが、いずれにせよそれらの呪縛から知を解き放ったのは、この一見すると後ろ向きに見えるヒュームによる批判だったのである。人間的誤謬の可能性が、新しい知の領域を成立させた、そのことは何度でも確認しておく必要がある。

3 統計的実体としての社会

統計学の歴史を辿ると、この「実体から関係」という変化がその受容に大きく寄与していることが分かる。

イアン・ハッキングがその名著『偶然を飼い慣らす』⁶のなかで描き出す統計学の誕生は、それがまさにこの変化を生み出したものと似た圧力から登場してくるものだ。もっともこちらでは、本性と因果法則が偶然性へと取って代わられる運動として描き出されているのだが、ともあれここでも、本質なる仮構の実体とその属性から演繹されるはずの因果法則が標的とされている、という点でよく似た展開を迎えることになったのである。

統計学の前史となるものはやや雑然としている。十七世紀前半のイングランドではすでに、ベスト対策も兼ねた死亡者に関するデータの収集が行われていた。同時に、たとえばドイツでは、言ってみれば都市オタクのマニアックな数字集めまで含む、諸々の雑多な数字の積み上げも存在した。古典的な哲学の伝統で「数多的なもの」に払われる注意がほぼ皆無であったことを考えれば、この種の数字の蓄積が知識人からはなんの尊敬の対象にもなっていなかったことは明らかである。しかし、たとえばその死亡率のデータは、オランダでは年金制度改革のために利用されるようになる。こうして一七八六年、ゲーテはその『イタリア紀行』のなかで「我が統計的精神の時代」と記す。この変化の先駆けの一人となったのも、やはりライプニッツであった。かれは統計学に深い関心を持ち、それを「国家の力」を明らかにするものと考えた。イングランドでは政治算術という用語が当時は使われてい

たことから見ても、その目的意識ははっきりしている。

ミシェル・フーコーはこれらの統計技術の導入の背景をこうまとめている⁷。ドイツにおいては医学と国勢調査が結びつき、「国家医学」を誕生させ、これによって公衆衛生改善を目指すと同時に、医学の規範化、教育プログラムと資格授与の公的管理が進む。フランスにおいては都市医学として導入され、プロレタリアートの流入に伴う貧困層の増大と疫病流行にたいする措置を担う。ここには、中世末期からの緊急政策(自宅待機、地区分けと監視、報告書と情報集中、立ち入り検査)などの伝統が引き継がれているが、その性格はやや異なったものになり、排除から細分化された監視へと移行していく。イギリスにおいては労働力の医学であり、貧民の疫病防止によって社会的安定を図るものとされる。このあたりは、公衆衛生学と疫学の成立事情に他ならない。

つまり、これらの変化は、一方で年金や保険業それからもちろんギャンブルのための確率論の洗練化によって、他方では明確な境界をもつ閉じた集合としての国民国家の誕生とその政治的、経済的、公衆衛生的諸政策によって支えられたのである。

前者の嚆矢となるのは、先にも触れたように十七世紀後半のオランダでは終身年金の策定のために死亡統計が必要とされたことだろう。後者はナポレオン統治下のフランスに代表されるもので、一連の統計的データの積み重ねを通じて、社会法則を発見することが期待されていた。コンドルセの言葉を借りれば「社会数学」である。というより、社会(その言い方が極端であれば、少なくとも社会学の対象としての社会)そのものがこの法則性の発見によって成立したのである。自殺率に見るような統計的な安定性はそこに法則があることを予期させた。社会学の始祖デュルケムにならばそれは「宇宙的な諸力と同じくらい現実的な力」の機能する場であったのである。まずは国民国家の誕生により、統計の対象となる明確な集合が規定可能になる。ついで、その統計によって見出されたある種の法則性が、こんどは対象となる集合の自明性や独自性を裏付けるものとして受け取られ、ますます強固に信じられる、こういったループが成立したのである。われわれが「地殻変動」という言葉を使うのも、こうし

⁶ イアン・ハッキング『偶然を飼い慣らす』(石原英樹、重田園江訳、木鐸社、一九九九)。

⁷ ミシェル・フーコー『社会は防衛しなければならない』(石田英敬、小野正嗣訳、筑摩書房、二〇〇七)。とくに一九七六年三月十七日の講義。

たかたちのループが形づくる社会的リアリティの増大こそが、ひとつの概念の信憑性を増すものだと考えるからだ。

とはいえ、個々人の集合を超えた社会法則があり、それが一定の強制力を持つ、というこの観点は、こんにちの目からはばかばかしいものに映るかもしれない。しかしエヴァルトは、こうした統計の中でも、職業上の事故のもつ一定性が、個々人の不注意や無能力には還元出来ないリスクの存在を認識させ、その結果としてリスクを応分に負担する必要が理解されたことが、福祉社会の成立に大きく寄与したことを論じている。つまり、たんにパターナリスティックな公衆衛生的政策の一環というだけでもなければ、むしろ人道的配慮というだけでもない動機づけもあり、それを統計学が支えたということだ。

この点から見れば、さまざまな意味で福祉社会や社会保障が危機に瀕しているこんにち、この社会的なものの出発点の一つをある程度理解しておくことは、意味のないことではないだろう。たとえば重田園江は、エヴァルトを援用しながら、今日的なリスク細分型保険がこうしたある意味で粗野な統計学をもとにした福祉社会を乗り越えてリスクの自己責任を可能にした、という点にポスト福祉社会の到来の一つの淵源を仮定している⁸。言ってみれば福祉社会のリアリティを成立させたその道具が、今度は福祉社会のリアリティを崩している、というわけである。ここにも、やはり一つのループがある可能性は高いのだ。

4 「現象」への近似としての真実モデルの交錯

とりあえずのところ、ここまでの内容から伺えるように、ヨーロッパの思想の伝統のなかでは軽視されてきた定量的なものが、古式ゆかしい実体概念では対処しきれない問題に対する、それぞれやや異なった角度からの対応策として浮上してきたことが分かる。その対応策は、結果として統計的リアリティとでもいべきものとしての社会そのものを成立させ、保険や年金といった実利的な経済性をバックアップによりいっそうそのリアリティを高めた。正確に言えば、その仮構に従うことで得られる利益の蓋然性を高めた。

そう考えれば、広井のようにEBMを、実体分からないとはいえ対処をせねばならない「現象」を、で

きる限りの客観性を持って取り扱おうとすることから成立したものと、考える理由がよりよく理解できるはずだ。

そして、このことを受け入れれば、われわれの視野はいささかなりと広がることになる。つまり、われわれは他にも、捉えがたい現象をできる限り合理的に説明する努力をしていたのではないのか。むしろ、その有効性、客観性に違いがあるように見えるかもしれない。しかし、それぞれが用いられる領域や条件に応じて、それは一定の合理性を持つのであり、まずはそのあり方を把握しておくことが重要なのではないかと。ここまで描いたエビデンス・ベースドという語の背景はいかにも概略に過ぎないが、それでもそれがさまざまな思想史的条件の中に成立していることはご理解いただけたのではないかと思う。

では、それ以外の、さしあたり便宜的に「定性的」とされた説明モデルでの「真実の作り方」はどうだったのだろうか？ ここからは、そのなかのひとつ、「証明」と「エビデンス」の語の変遷を概略していくことにしたい。そのことによってわれわれは、さまざまな「真実の作り方」が、しかも状況によって互いに複雑に入り交じていたことを理解できるだろうし、その理解は将来的には、この現実の社会の中での相互理解の進化に向けた一歩となるはずである。

5 「エビデンス」と「証明」の略史

証明 *demonstration* という語は、ラテン語のデーモンストラティオ *demonstratio* に遡る由緒正しい語である。しかし、ご存じのようにこの語はデモ行進、デモ活動という際のデモンストレーションの語源でもある。これはいったいどういうことだろうか？ 両者は何の関係もないのだろうか？

歴史家のカルロ・ギンズブルグは古代ローマにおけるこの語の定義を紹介している⁹。『ヘレンニウスにささげる弁論術』のなかでは「デーモンストラティオというのは、なされるべき仕事や事物が眼前にあるかのようにみえるよう、事物を言葉によって表現する場合のことである」。つまり、「弁論家の側のほとんど魔術に近い所作を前提としている」。そして、われらがエビデンスの語源であるエーウィデンティア *evidentia* はここで必要とされる「生き生きと」した再

⁸ 重田園江『フォーコーの穴』（木鐸社、二〇〇三）、とくに第三章。

⁹ カルロ・ギンズブルグ『歴史を逆なでに読む』（上村忠男訳、みすず書房、二〇〇三）。特に第二章。

現に相当する語だったのである。

しかしながら今のわれわれには、ギンズブルグが描き出そうとした、デーモンストラティオとしての歴史叙述というものはいささか理解しづらい。ギンズブルグの説明を一見すると、どうもわれわれには、真偽のいかんによらず説得力を持つものが勝ちであり、その勝者に語られたものが真実である、と述べているようにも思われかねない。

そうなるとわれわれが対案として次に思いつくのは、単純な意味での実証主義、つまり歴史は史料をしておのずから語らしめることにその真髓があり、歴史的資料の精査と厳密な吟味がごく自然にその語りを導き出してくれるだろう、と信じる態度である。

この立場では、その資料がわれわれにはあくまで全く関係ないもの、われわれには何一つ利害関心をもたせないもの、であればあるだけ、その信頼性をより高いものと評価することになる。ギンズブルグは、近代の歴史叙述の成立を古遺物学と年代記の収束していく十六世紀以降に見いだしている。そしてそれは印刷術の発展にともなって、決して変わることはない、何もかも変更を加えることのない、という性質を持ち始めた文字史料の重視とひとつにより合わさっていく。明晰判明に語られたもの、目に見える存在としてありありと形にしてしめすこと、すなわちデーモンストラティオに近いものとしての歴史叙述から、あくまでモノとして、それ自体ではわれわれに何も語りかけることのない、利害関心を持たない証拠性、つまりエビデンスへの重心の移動が、その変化を物語るのだとギンズブルグはいう。

6 「世界像」の時代へ

なるほど、昔はそうだったのかもしれない。しかし、十六世紀以降にそのような変化があったのなら、それは立派な進歩だ。そしてわれわれは決してそこから退化することはない。だから昔の話は忘れよう。

そういうご意見もあるかもしれない。しかし、そこでは一つのことが見落とされてしまう。というのもこれらは、その対極にあるような趣とは裏腹に、一つの、同じものの裏返しだからである。つまり、どちらの場合も、判断する主体はわれわれである、ということは

当然の前提となっているのだ。

しかし、デーモンストラティオが意味するのは本当にそういうことだったのか？ その問題を別な角度から照射することは、いささか理解の助けになる。ポール・ヴェーヌはその著書『ギリシア人は歴史を信じたか』において、叙事詩他に対して何故ギリシア人が疑いをもたなかったのかを、こう述べている。「私が想定するには、どうやら詩は、語彙・神話・定型表現と同じ側にあるというのが説明になるらしい。詩は、詩人の天分にその権威が求められていたのではない。話は逆で、詩人の存在にもかかわらず、詩は一種の読み人知らずの言葉なのである。それには話し手がいない。詩は「とされている」ことなのだ。したがって詩は、嘘をつくことができない。なぜなら、話し手がいてはじめて嘘がつけるからだ。散文には話し手がいる。話し手は、本当のことを言うか、嘘をつくか、誤解しているのか、のいずれかである。しかし詩ということになれば、語彙に作者がいないのと同じで、作者をもたない。」¹⁰

ここには、見かけ上のその平明さとは裏腹に、きわめて豊かな示唆がある。詩は作者をもたない。われわれは、ギンズブルグが語る古代ローマにおけるデーモンストラティオもおそらくはこうした意味だったのではないかと仮定することはできる。それはただの空想や虚構の押しつけとは違った位置に置かれるべきものだったはずなのだ。ではなぜ、いまのわれわれにはそのような妄想の一種のようにしか思えなくなってしまったのか？

一つの答えは、近代以降の主観性における表象の位置づけから導き出せる。ハイデggerは「世界像の時代」において、近代をこう定義づける。

「世界像とは、本質的に解すれば、それゆえ、世界についてのひとつの像を意味するのではなくて、世界が像として捉えられていることをいうのです。」¹¹そして、その像は、表象化を行う人間、すなわち主体によって立てられた像である。「これはすべての存在するものを自分のまえにもってきて、その結果、それを計算している人間が、存在するものを確保し、すなわちまた確信[確実化]しうることを狙っています。」¹²

「表象することとは、前に-進みゆき、支配しようとする・向かって-立てる-ことです。表象すること

¹⁰ ポール・ヴェーヌ 『ギリシア人は神話を信じたか』(大津真作訳、法政大学出版局、一九八五)、一一九頁。

¹¹ マルティン・ハイデgger 『世界像の時代』(桑木務訳、理想社、一九六二)、二九頁。

¹² マルティン・ハイデgger 『世界像の時代』(桑木務訳、理想社、一九六二)、二四頁。

は、こうしてすべてを、そのような対象的なものの統一へと集めて追ひこむのです。¹³そして、この統一を果たすものこそが、ハイデッガーによれば近代において重視されるようになった体系そして価値と呼ばれるものである。

この見地を踏まえれば、われわれはギンズブルグの描いた変化を、一貫したパースペクティブに収めることが出来るように思われる。われわれの主観性はますます自分自身の前にある表象を、自分自身で創りだす、あるいは自分自身の創作物であると信じる。この世界の表象化を、ヘーゲルならば否定の力、そして内在化というであろう。これが同時に狂気の条件であることもヘーゲルは既に指摘している。

われわれは、その狂気の可能性から逃れるためにも、この自分自身の創りだした表象の確実性を求めねばならない。したがって、われわれは目の前にある対象が極力自分たちとは関わりを持たない、自分たちに対して利害関心をもたないものであることをまず必要とする。そのうえで、われわれに対して利害関心を持たない対象がかくも見事になんらかのかたちで体系づけられ、首尾一貫したものになるがゆえに、それは確実なのである、と。すなわち、われわれの文脈でいえば、なにひとつわれわれに関わることなくそこにある古遺物、われわれの操作の及ぶことなくそこに変容したものとしてある古文書、それらだけがわれわれの頼みとするものであることになる。そして、そこからよりいっそうわれわれの関与性を差し引いていくことが目標になるわけだ。同時に、デーモンストラティーオはただ単に自分たちの作り出した、妄想や狂気とたいして違いもしない表象を力任せに、あるいは特に詐術めいた技巧のもとに押しつけてくるだけのよう思えてくるのである。

7 結論：誤謬の存在論へ向けて

こうしてみると、本当の対立項は別にある。

ひとつの手が加わったもの、作為的なものは主観的なもの、それは虚構の側にある。こちらは、定性的なものに見える。そうでないもの、つまりヒトの手を離れたモノであり、しかもできればモノの性質そのものよりはモノの関係性の定式化へと近づくにつれ、客観性

が増していく。こちらは、定量的なものに見える。この両者を対立させる見方はいずれにせよハイデッガーの言う「世界像の時代」の裏表であり、その意味で真の対立項ではない。

ここで、統計学の起源を思い出してみることに意義がある。そこに測定誤差の問題があることはよく知られている。それを人間の過ちによって生じた、いずれ消え去るべきなにかではなく、自然そのもののランダム性として、つまりそれ独自の存在論的ステイタスを持つものと捉えることで事態は大きく変化したのである。

誤謬やエラーでしかないものを語らしめる、それは、たとえばヒュームが、かれにとって人間的誤謬以外のなものでもない因果関係の想定をそれでも人間の創造性へと置き直したことも通じている。このとき、この無根拠の想定とされた習慣は、この時代においてはたんに確率論的な問題でしかないが故に無根拠である、とされていた。しかし、いまわれわれは確率論的な問題を必ずしも無根拠としない時代に来ている。だからこそ、われわれが立ち戻るべきは、この起源であり、そこにおいて生まれてはいたはずの主体性の素描である。

ナラティブという言葉も、おそらくこのような意味で読み直されるべきなのだろう。それを、主体の内面にある、先のハイデッガー風の言葉を使えば「世界観」として捉えてしまうならば、それが妄想でないことを確認するためにはいずれ他者の承認を必要とせざるを得ず、それが最終的には科学の言説が提示する真理を自分なりのストーリーに組み込む、というかたちを採らざるを得ないことは目に見えている。いやな言い方をすればオブラートに過ぎない。ある意味では科学者の下請け作業というところだ。だがわれわれに真に必要とされるのは、誤謬それ自体が独自の存在論を持つようなかたちに捉えなおされたナラティブである。このとき、われわれはいま便宜的に「定性的」と「定量的」とに分かれたたものを、「誤謬の存在論」として位置づけることが可能になるはずだ¹⁴。

そこでは、語られる信念は必然的に虚構である。しかしそれは、その生の目的に従って、つまり合目的に構成されていく虚構である。ポール・ヴェーヌ論じるギリシアの詩人たちの虚構がそうであったように。だ

¹³ マルティン・ハイデッガー 『世界像の時代』（桑木務訳、理想社、一九六二）、六四頁。

¹⁴ むろん、その問題において「定量的」なるものが鮮やかに結論を出し続け、「定性的」なるものが後れを取っている感否めない。

からこそそれは、習慣という名のある意味ではきわめて確率論的なものをおのれのルールとして再構成するのである。他方でそれらのなかのいくつかは、たとえばヒュームの時代であれば、幾何学や算術といった当時の先端科学のもとに安定化させられる。しかし、人間のもつ本質的な誤謬可能性がその安定性を利用しつつ、ときに覆し、そのことでまた当の科学そのものがドグマ化せずに発展する余地を生む。

「では、精神はいつ主体へと生成するのか。それは一方では、精神がおのれの生気を奮い起こして、結果的に、生気を特徴としている一部分（印象）がその生気を他の一部分（観念）へと伝えるようにするときであり、他方では、一括されたすべての部分が何か新しいものを生産しながら共鳴するときである。そこに、超出の二つの様態、すなわち信念と発明がある」¹⁵。それはある意味では真理の自律的な運動にも似ている。それが一方でわれわれのナラティブを動かし、他方でそれを捉える統計的な努力を根拠あるものたらしめ、一種の「習慣」としての社会を作り上げさせるのである。

それを安易に定量的なものとの定性的なものとの和解と言うのは時期尚早である。しかし、いずれにせよわれわれが「正しい問題」という真理に対して、誤謬を犯すことができるというおのれの能力を利して近似的に迫ることは、間違った問題に正しい答えを出し続けることよりも、確かにいくぶんかは意味のあることであろう。遺憾ながら本稿ではまだ素描以下の存在でしかない誤謬の存在論ではあるが、将来的にその接近を支える基盤となることを期待しつつ筆を置きたいと思う。

¹⁵ ジル・ドゥルーズ『経験生と主体性』（木田元，財津理記，河出書房新社，二〇〇〇），二一二頁。